

57 桐村克己著「歯の養生法」の原資料の 疑義についての研究

森 山 徳 長

我が邦最初の歯科医学書とされる、桐村克己著『歯乃養生法』の原資料につき、第十九回本学会において発表し、その結論としては、校閲者小幡が『明治八年予が西洋歯科医として東京で開業して四年、同業桐村君が米國費府の歯科医士ホワイト氏が著せる小冊子の訳稿を示したので之を見ると、歯の初生より歯の脱落に至るまで天然の法則を記し、歯の養生法としては、不注意により生ずる患者とこれを避ける方法を示してあますことがない。因つて校訂して世人に示したい。(大意)』と緒言の序文で述べているので、本書が当時フィラデルフィアのSホワイト会社発行のデンタルコスモスDENTAL COSMOSの主筆ジェームスW・ホワイトの著、家庭医学叢書の一冊『口腔と歯』(The Mouth and Teeth)の抄訳

であるとした。

J・W・ホワイトは、S・S・ホワイトの兄であり、当代一流の歯科医である。本書は、本学『伊澤文庫』に一八八二年刊第二版を所蔵しており、筆者は短絡的にその抄訳であると考え、その様な文脈で発表した。

たゞし、桐村の『歯の養生法』は、一般的な歯科衛生法についての前半部分に対して、後半では義歯様陶歯の製造法に触れている。前半は旧漢字萬葉仮名交り文であるのに対し、後半は旧漢字仮名交りの明治普通文で書かれており、ホワイトの『口腔と歯』とはニュアンスの違いを持つ疑点があったことは否めない事実であった。

時が経過して、日本歯科大学『医の博物館』の樋口輝雄氏は、一九九八年十一月、本学会第二七八回例会において、J・W・ホワイトの『口腔と歯』こそが、高山紀齋の『保齒新論』の翻訳原本であることを、章数、内容、付図の櫻版も全く全巻同一であることから論証された。これには筆者も全面賛成する。

桐村、伊澤、高山が明治十二、十四年に書いた大衆向けの啓蒙書は、正規の歯科医が数十名に満たない時代

で、業権拡張の上からも当然の成行きであったと思われる。さて、桐村の種本は何であったのか？ 該当する書物はCrowley等の書誌学書にはない。

そこへ、日本版翻訳出版で親しくなった『図説—歯科医学の歴史』の著者M・リング氏から時々送られて来る文献別刷の中に答を発見できた。それはSSホワイト社が顧客に提供する陶歯の箱に入れるのに丁度適した小型小冊子であった。

『The Teeth: Natural and Artificial.』 By J.W. White 1873. 表紙裏にホワイト社が一八七二年に版権を取得したと銘記してある。大きさ九・一×十四・二cm厚さ〇・二cm裏紙のみ薄青色紙を用いた仮綴本である。

書誌的構成は扉頁を含め三六頁、目次は無く、段落も無く、二一頁下から四列目から『歯を失って入歯で噛む事を考える者は、誰でもその組成や製法を知ろうと慾するであろう。』という書き出しで「人造歯」の説明が始まっている。

前半と後半の内容は、大凡以下の通りで、完全な逐語

訳となっている。緒言の通りである。

1、歯の衛生に対する無知への警告 2、歯科医学の発達 3、口腔の構造と機能 4、歯牙の解剖 5、初生歯（乳歯）とその萌出時期 6、初生歯の養生法 7、再生歯（永久歯）とその萌出順序 8、再生歯の保存に必要な注意（イ）歯石の害（ロ）齲歯の治療法（ハ）清掃の方法（ニ）定期的な診療

後半では、二一〜三二頁にわたり、

- 1 陶材の主成分と原料の製法
- 2 陰型の製法と材料の填入
- 3 焼成法と、色調・形態の付与
- 4 患者に適合する陶歯選定の諸条件を記す。

その後に、ホワイト社の宣伝文が、四頁にわたり、ピンの位置の図入りであり、ピンが「足形」をしていて丈夫な製品であることをPRしている（桐村の訳にはこの部分は省略されている）。

（東京歯科大学）